

## 巻頭言

矢野智司

物理学や化学などとは異なり、「教育」については誰もが自分の経験をもっており、また多くの大人にとっては自分の子どもをとおしてそれが何であるかを知っている。そのため、「教育」について語ることは困難なことではない。「教育」を語ることはきわめて日常的なことなのである。どうすれば自分の子どもの成績が上がるのか、どうすれば娘へのいじめを解決することができるのか、子どもをもつ親はすべて日々「教育問題」と取り組んでいるし、「教育」がどうあるべきかについて語っている。

そのとき、現在の「教育問題」にたいして対比的に提示される「あるべき教育」のイメージは、およそつぎのようなものである。子どもの「自主性」を認め「自由」があり、子ども一人一人の「個性」に配慮して、外部からの強制的な暗記中心の詰め込み「教育」ではなく、子どもの「興味」「関心」にしたがって「理解」と「自己表現」に重点を置いた「教育」、……。このイメージは、いまからほぼ百年前に登場した「新教育運動」において提示された「教育」イメージである。教育学研究者は、この「自主性」「自由」「個性」「興味」「自己表現」が何を意味しているのかをめぐって、繰り返し議論してきた。しかし、そこでは「教育」という世界の区切り方自体は問題にされることはなく、したがって批判によって変化を受けることはなかった。

「あるべき教育」を考えるとすることは、「教育」の存在を前提とするがゆえに「教育」への根本的な反省を欠くことになり、「教育」という主題を旧教育とともに強化し続けてきたのである。ここでは「教育」という主題自体への反省を欠いているのだ。人間は「教育」を必要としているのだろうか。たしかに人間の生成変容にはさまざまなものがあり、他者からの働きかけが必要とされる。しかし、近代学校をモデルとするような「教育」は必要なのだろうか。ポストモダニズムの台頭は近代を対象化し、その結果、近代のプロジェクトとしての「教育」を問いの対象とするようになった。そこで明らかにされたのは、私たちが「教育」を考えるとときの思考の枠組みが、根本的に啓蒙主義によって生みだされた「人間」の言説をもとに形成されているということである。学問というのは、このような自明性を問い、

私たちの問題の立て方や語り方を反省させるものではないだろうか。

それでは、この「教育」の原イメージから思考を解き放つためには、一体どうすればよいのだろうか。言葉が「新教育思想」の言葉であるかぎり、どのような実践もすぐに「教育」の主題に回収されてしまう。重要なのは、「教育」の主題に回収されない異質な言葉、異質な語り方を生み出すことにある。どうすれば「教育」の主題に回収されない異質な言葉を語り直すことができるか。それは、どうすれば私たちの身体の詳細にまで浸透している「教育」を超えた、人間の生成変容を描くことができるかという課題でもある。「教育」におけるさまざまな事象を問いつづけるなかで、「言葉」を「物語」を作りかえることができなければならない。

臨床教育学と教育人間学とは、このような課題を担っているのだと思う。この年報『臨床教育人間学』もいよいよ3号に突入した。若い研究者たちの荒削りの完成品ではないにしても挑戦的な論考を掲載することができた。また、今回もスタッフ全員から論考が寄せられた。新しい言葉、語り方を模索しながら前進していきたいと思っている。ご批判ご感想を願えればと思っている。

2001年3月